



「歴史の証人文観 常楽寺に痕跡あり」

加古川北高校の北西方向で、JR日岡駅からすぐのところに常楽寺があります。すぐに石段が見えてきますが、登らずに駐車場の奥へ進んで行くと、右の写真の光景が見えてきます。3基あるうちの真ん中が今回テーマとなっている文観の母の墓塔（宝塔）といわれています。塔身に彫られた銘文から、正和四年（1315）に道智という僧が発起人となって建立したことがわかります。室町時代以前の宝塔は、県下で約20基、加古川市内では2基のみしか確認されていません。文化財として、非常に貴重なもので、県指定重要文化財に指定されています。



さて、文観という僧を紹介しましょう。生まれは、加古川とされています。正安四年（1302）奈良の般若寺の僧となっています。その後、加古川に戻って常楽寺の再興をします。遁世僧として、貧民救済を行ったとされています。

しかし、歴史の表舞台に登場することになります。後醍醐天皇に重用されて、醍醐寺座主、天王寺別当と昇進します。嘉暦元年（1326）から後醍醐天皇中宮禧子の御産祈願と称して鎌倉幕府の調伏を行っていたことが発覚し、元徳二年（1331）には逮捕され硫黄島へ流罪となります。鎌倉幕府滅亡後は、東寺長者となり、建武の新政で栄華を極めます。その後、危険視され、甲斐国へ流れます。南朝方の吉野へ赴き、大僧正となります。波乱万丈の人生といえます。

常楽寺を訪れ散策をすると、多くの石造遺品の存在に目を見張ります。このことは、当寺が奈良の西大寺の末寺であることから、石工集団伊派の影響を強く受けた作品であろうと考えられます。

歴史的にも文化財的にも非常に貴重なものが、加古川北高校のすぐ近くに存在していることを誇りに思います。